

絵所秀紀先生の定年退職をお祝いして

経済学部長 鈴木 豊

絵所秀紀先生は1970年に東京都立大学経済学部を卒業され、1972年に東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程を修了し、修士号を取得された後、本学経済学部の一般助手として採用され（採用科目は「後進国経済論」）、教員経歴をスタートされました。と同時に、1972年に法政大学大学院社会科学研究科経済学専攻の博士後期課程に入学されました。この「一般助手」の制度は、絵所先生が最後だったとのこと。そして、博士後期課程を単位取得満期退学された後、1975年4月に助教授、1984年に教授へと昇格され、2005年～06年には経済学部長、2008年～09年には比較経済研究所所長を務められて、実に46年の長きにわたって、法政大学経済学部の教育研究に多大な貢献をされてきました。教授会参加は、霧見先生とともに1975年から（43年間）と記録されていますので、一般助手（博士後期課程）3年間も合わせると、法政では46年の教員歴ということになります。

絵所先生は、学部教育においては、当初より「開発経済論」を担当されていましたが、最初は「開発経済論」や「後進国経済論」という講義は日本でほとんど例がなく、したがって、参考にすべき教科書もないわけですので、納得いく講義ができなかったと言っておられました。その時に、教授会参加4年目にして、在外研修員A3の枠を使って、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（London School of Economics: LSE）、サセック

ス大学王立開発研究所およびインドのボンベイ大学に2年間留学(1978/04-1980/03)され、開発経済学の研究や講義への着想を得たとのことでした。当時、まだ30歳~31歳でいらっしゃるわけですので、そこで留学に送り出す我が経済学部の懐の深さが感じ取れます。その後、40年以上にわたる教育上の貢献や本当に多数のゼミ卒業生、そして社会人大学院生を輩出されてきたことは、だれもが知る功績です。

研究においては、「国際開発研究大来賞」を受賞された単著の『開発の政治経済学』(1998)を含め、単共著合計で70冊近くの著書を出版して来られたことが、まず挙げられます。(数がとても多いので、おおよその数であることは、ご寛容下さい。)

それから、今では恒例となっている「比較研サロン」(教授会終了後に年3回、比較経済研究所で開催される学部ファカルティーの研究会)も、比較研設立時に所員であった絵所先生のアイデアです。研究の刺激を常に求められていたことの証左でしょう。

私も1995年に本学着任以来、22年間一緒しているわけですが、私が絵所先生について一番印象があるのは、経済学部の教員採用人事で座長を務められることが多く、採用候補者の研究の本質とその評価の説明がとても上手だということです。今回、巻頭言を書かせていただくにあたり、絵所先生の論文を何本か読ませていただきましたが、インドの開発経済学の研究の展開を、歴史的・思想的・方法論的に構想し、ノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・センをはじめ、様々な研究者の評価を、的確かつ独創的にされていることが分かりました。それを読ませていただき、教授会での採用候補者の業績紹介が上手なものも改めて納得したところです。

今回、先生の論文を少し読ませていただいたと書きましたが、その中でも、ノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・センの開発思想についての論文(「後期アマルティア・センの開発思想」経済志林)は、興味深かったですので、少々、言及したいと思います。

それは、センの有名な「1943年ベンガル飢饉の分析」の論文で用いたと

される「エンタイトルメントの枠組み」で、ある人のエンタイトルメントは、その人がもともと所有している「エンダウメント」と、それを交換と生産によって使用することで得られる「交換エンタイトルメント」によって決定され、したがってエンダウメントが低下したり、あるいは交換エンタイトルメントが機能しない場合、生じるエンタイトルメントの中に十分な食糧が存在しない「剥奪」の状態では、飢餓が生じるというアイデアに大変興味を持ちました。

というのは、私も法政大学の在外研究員制度を使って、2年ほどハーバード大学経済学部で留学させていただいた際、2016年度のノーベル経済学賞を受賞された契約理論のオリバーハート教授に受入れ教授になって頂きましたが、ハート教授は、近年、不完備契約理論に行動経済学のアイデアを導入し、「契約」が、当事者に「参照点」（これは自分の既得権だという感情を与える基準点）を与え、その「参照点」が各人で異なるため、a conflict of entitlements（エンタイトルメントの対立）につながり、自分のエンタイトルメントを侵害されたと感じた当事者は、権利侵害の一定倍を相手に仕返しするというようなアイデアを取り入れておられます。こういうところから、セン教授もハーバード大学教授ですので、同じく2007年にノーベル経済学賞を取られたエリック・マスキン教授なども交えながら、高度な知の交流があったように想像を掻き立てられ、楽しかったのです¹⁾。このように読者をひきつけ、触発する内容が数多く盛り込まれているところが、先生の著作の優れた点かと思いました。

また、開発経済学の研究論文を深く丁寧に読み込んで評価する姿勢から

1) セン教授は、「社会的選択と厚生経済学」への貢献でノーベル経済学賞を受賞されたわけですが、メカニズムデザイン論を専門とするマスキン教授は、ハーバード大学でセン教授と社会的選択 Social Choice の共同講義を持たれていましたし、ハート教授は、マスキン教授と「不完備契約理論の基礎」をめぐる、「ケンブリッジ論争」を展開したほどお互いを認め合う中ですので、3人の知の交流を通じて、ハート教授がセン教授のエンタイトルメント論に刺激を得ていたかもしれないことは十分考えられます。もちろん、最終的な学術成果は、全く独立のものですが。

は、先生のお弟子さんへの指導は、さぞ厳しかったのだらうと容易に想像され、実際その通りだったようですが、だからこそ、絵所ゼミ出身の縁のある研究者を多数輩出したのだと思います。そうした点は、少しでも見習っていきたいと思います。

絵所先生は、開発経済学の研究の展開を、歴史的・思想的・方法論的に的確かつ独創的に評価され、その上に培われたご自身の開発経済へのインサイトや想いを込めて、12月19日に最終講義をされ、大変興味深く聞かせて頂きました。

その最終講義の場では、学部長の立場上、質問はしませんでした。この場を借りて、先生の「研究方法」と言いますか、どのように先生は、開発経済への視点（インサイト）を育てられたのか、その「知の創造プロセス」を聞かせて頂けたらと思います。インドの開発経済学の巨人の論文を読んで評価し（「知」）、他方で何度もインドに実地の聞き取り調査に赴き（「実践」）、そこで見聞き感じたことを、自分のそれまでの開発経済学の理論的な評価・インサイト（知）にフィードバックして、さらに高次元のものに高める、こういった「実践知」形成的なプロセスだったのでしょうか？ある意味、理論研究とフィールドワークのインタラクションの仕方を、後進の経済学者に教えて頂ければ幸甚です。

長くなりましたが、絵所先生、46年間、本当にお疲れ様でした。経済学部を代表してお礼申し上げます。今後も我々後輩に、いろいろとアドバイスいただけましたら幸いです。